



紙の使い道

土屋賢二

幼児のころは紙が苦手だった。障子やふすまよりも壁の方がはるかに書きやすかった。わたしの家には画用紙もノートもなく、書くことのできる紙としては障子とふすまだけだった。当時のわたしにとって、紙は破って遊ぶものだった。

それに対して、壁はスペースが広い上に、鉛筆やクレヨンで書いても破れない。ただ、壁の欠点は親に叱られることと消せないことだった。好きな女の子の名前を書いた後で、別の女の子が好きになったら、前の女の子の名前が消せないため、上から塗りつぶすしかなかった。どういいう心理なのか、今となつては理解に苦しむが、たぶんアルタミラの洞窟に壁画を描いた原始人と同じ気持ちだったのではないかと思う。

大人になると、紙は破るためにあるものではないことが分かり、いまでは破る以外の用途にも使っている。紙の用途は非常に

広く、電子機器がいくら多機能化しても紙にはかなわない。紙は、情報取得(本、新聞、カタログなど)、娯楽(本など)、自己表現(好きな女の子の名前を書く、「バカヤロー」と書くなど)、折り紙や貼り絵をする、ゴキブリをとるなど、多岐にわたる機能をもっている。電子機器と同じ機能でも紙の方がすぐれていることが多い。たとえば持ち運びできる機器で、アイデアをメモする機能をもつのは、ボイスレコーダー、携帯、電子手帳などだが、わたしは紙を愛用している。

アイデアというものは貴重である。いったん逃すと取り返すのが難しい。しかも貴重なアイデアほど復元することが難しい。その証拠に、わたしが思い出せるアイデアは、ロクでもないものばかりだ。

貴重なアイデアを逃さないでおくために、ボイスレコーダーや電子手帳などの電子機器を使ったこともある。だが電子機器は入力などの操作に手間取り、その間にアイデアを忘れてしまう(しかも一瞬で消去できるため、データを失いやすい)。忘れるには一秒あれば十分なのだ。その上、風呂の中でアイデアを思いついたときなどは電子機器は使えない。電子機器を風呂



土屋賢二(つちや・けんじ) ●岡山県生まれ。官僚を目指し、東京大学文科一類に入学するも、考えるところあって哲学科に転向。卒業後、不動産業を経て、お茶の水女子大学に着任し、教授に。今年3月で同大学を退官(定年)し、執筆業に専念。50歳からの苦悩を綴ったエッセイは好評。現在も「週刊文春」に「ツチヤの口車」を連載中。近著に「ツチヤの資格」、「教授の異常な弁解」など多数。

にまでもって行くほど、わたしのアイデアは貴重ではない。

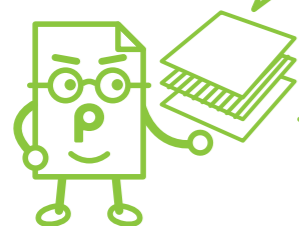
色々試した結果、いまではメモ用にはコピー用紙を一枚、四つに折って持ち歩いている。紙は、どんな機器よりも軽量で、捨てやすい。簡単にメモでき、メモディーを思いついても凶柄を思いついてもすぐに書ける。退屈なときは円周率の計算だつてできる(計算方法を知らないが)。

ただ、このやり方にも限界はある。①メモした紙を三日後に読み返したとき、意味の分かるメモが約三割しかない、②判読できるメモはたいていロクでもないアイデアだ、③アイデアの中にはそもそもメモする意味がないものがある(原稿にこう書けばよかった、授業でああ言えばよかった、妻にこう言い返せばよかったなどのアイデアは、いくら思いついても手遅れだから、メモする意味がない)、④判読不可能なメモの紙は捨てられないため、机の上にたまり、取捨がつかなくなる。

ペーパー君のつ・ぶ・や・き 活動

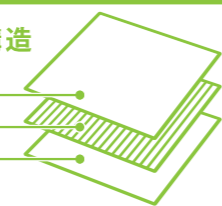
段ボールは、「3」がカギ。

1本ではもろい矢も、3本あわせれば強くなる。段ボールだってそうなんです。ライナと呼ばれる2枚のボール紙と、その間に入っている中しんと呼ばれる波形のボール紙。この3枚で支えあうことで、紙とは思えないほど頑丈に。なんと重さ1t以上のクルマを、段ボール4つで支えられるほどなんです。



段ボールの基本構造

ボール紙 / ライナ
波形ボール紙 / 中しん
接着面



紙のことをもっと伝えたい。詳しくは、「ペーパー君のつ・ぶ・や・き」WEBサイトをご覧ください。

<http://kamitsubu.com/>

◆次回は4月29日号、三浦しをんさんです。

提供 ● 日本製紙連合会 <http://www.jpa.gr.jp>

photo : Shiro Miyake